

なぜ神谷美恵子はあるのにもハンセン病に捉えられたのだろう。他のいかなる人間の苦しみではなく、他ならぬハンセン病という苦しみがなぜ神谷を捉えたのだろう。

「癩者に」という神谷の詩がある。

光うしないたる眼まなこうつろに

肢あしうしないたる体からだになわれて

診察台だの上にどさりといのせられた癩者よ

私はあなたの前に首くびをたれる。

あなたは黙っている

かすかに微笑ほほえんでさえている

ああ しかし その沈黙は 微笑は  
長い戦の後にちちとられたものだ。

運命とすれすれに生きているあなたよ  
のがれようとて放さぬその鉄の手に  
朝も昼も夜もつかまえられて

十年、二十年と生きて来たあなたよ  
なぜ私たちがなくてあなたが？

あなたは代って下さったのだ

代って人としてあらゆるものを奪われ  
地獄の責苦を悩みぬいて下さったのだ。

ゆるして下さい、癩のひとよ

浅く、かろく、生の海の面に浮かびただよい  
そこはかとなく、神だの靈魂だのと  
きこえよき言葉あやつる私たちを。

心に叫んで首をたれれば

あなたはただ黙っている

そしていたましくも歪められた面に  
かすかな微笑みさえ浮かべている。

これは一九四三年二十九歳の神谷が研修のため愛生園に滞在した折の詩と思われる。先立って一九歳の時、神谷は全生園で最初のハンセン病との出偶いをしている。そこで受けたハンセン病体験とも言うべき衝撃は、十年の時の中で消えることなく深化、結晶化されていったことを詩は語っている。

神谷がそうであるように、ハンセン病は接してしまった者の心に何らの痕跡を残さずにはおかない。「光うしないたる眼うつろに」「肢うしないたる体」「診察台の上にとざりとのせられた」「いたましくも歪められた面」。最初の出遇いが神谷に与えた痕跡とは、ハンセン病という病が、病を外部に顕在化させ、人間の外見を変容させる性質を持つていることによって与えられたものと言える。

この世界には、難病とされる病気は数多くある。しかし、ある病を患ったとしてもそれは身体内部に隠され、外部に現れることは稀である。そこでは、病者と健常者とは外見からは識別されない。ハンセン病が単なる病気の域を越えて私達を捉えずにおかないのは、ハンセン病のこの顕在性、可視性にあると思われる。

詩にあるように、可視化される病としてのハンセン病は罹患した者から「人としてあらゆるものを奪」う。他の病のもたらすものが、生物としての肉体の破壊・喪失に留まるとすれば、ハンセン病は単に肉体だけでなく、私達にとって存在の根拠である人間的関係全体の破壊・喪失をもたらす。「地獄の責苦を悩みぬいて」「運命とすれすれに生きていく」。私達の生とはいかに、視覚を始めとする感覚による判断・価値づけ・評価によって成り立っていることか。神谷がハンセン病患者を目の当りにして、以来消えることなく負った痕跡とは、何よりも感覚と、その基礎の上の仮象とも言える

ものが一切取り払われた後に、「あえぐ生命の単位」となり果てた人間実存の赤裸の姿によるのではなかったろうか。そして「長い戦」であるハンセン病の苦しみの中に、神谷自身の生を根底から震わせる人間の真実を見出したが故に、「人としてあらゆるものを奪われ」てもなお奪われ得ない人間の真実——深い意味での精神としての人間——を、神谷は精神科医として、以後の全仕事を通して索めたのではないだろうか。

「癩者に」の中で、すぐれて神谷美恵子という人間のハンセン病への関わり方を際立たせている言葉がある。「なぜ私たちでなくあなたが？」「あなたは代ってくださったのだ」。ハンセン病との出遇いは、相即してハンセン病者の側から神谷自身の生を捉え直させ、全くの偶然による健常者という負い目を神谷に負わせた。「私はあなたの前に首をたれる」「ゆるしてください、癩の人よ」。ハンセン病患者に向って自己を無限に低くし、「健康と

いう不当利得」に与る自己のハンセン病患者に対する贖罪意識は、常に神谷の全仕事に通奏低音として流れている。そして同時に、神谷の仕事を貫くこの贖罪意識こそ、後の詩「この世のいのち」における「この世のいのちだけが存在ではない」という「この世のいのち」を超えた、そこにあつてはハンセン病と非ハンセン病が同一の地平に立ち得るものの探求へと神谷を導いたのだと思われるのである。